

人生 40 年の世界： 江戸時代の出生と死亡

上智大学経済学部
鬼頭 宏



現職： 上智大学経済学部 教授

略歴： 1947年生まれ。1969年慶義塾大学経済学部卒業，1971年同大学大学院経済学研究科前期課程修了，1974年同研究科後期課程単位取得満期退学。経済学修士。

1976 - 80年慶應義塾高等学校教諭。1980 - 82年上智大学経済学部講師，1982 - 89年同学部助教授，1989年より現職。この間，慶應義塾大学総合政策学部，同経済学部，亜細亜大学経済学部、同大学院経済研究科，松山大学経済学部，共立薬科大学進学課程で非常勤講師。一橋大学経済研究所，スタンフォード大学東アジア研究センター客員研究員。国際日本文化研究センター，国立民族学博物館共同研究員。

専門： 歴史人口学 / 日本経済史

著書： 「日本二千年の人口史」(PHP研究所，1983年)，「シリーズ人口学・4 生存と死亡の人口学」(共著，大明堂，1994年)，「講座生活学・5 生活文化論」(共著，光生館，1995年)，「講座文明と環境 第8巻 人口・疾病・災害」(共著，朝倉書店，1995年)，「人口学の現状とフロンティア」(共著，大明堂，1996年)，「講座・文明と環境 第2巻 地球と文明の画期」(共著，大明堂，1996年)，「地球日本史・2 鎖国は本当にあったのか」(共著，産経新聞社，1998年)，「文明学-長寿命型の文明論」(共著，ウエッジ，1998年)，「全集 日本の食文化 第三巻 米・麦・雑穀」(共著，雄山閣出版，1998年)，「鎖国を開く」(共著，同文館，2000年)，「人口から読む日本の歴史」(講談社，2000年)。

1. クイズ 江戸時代を生きたひとびとは何人？

明治維新以後，現在まで132年間の出生数は2億1000万人ないし2億2000万人である。維新当時の人口を加えれば，近代を生きてきた人々は2億5000万人を超える。

同様に江戸時代には，いったいどれくらいの数の人々が生まれて，死んでいったか，ざっと計算してみよう。くわしい計算の根拠は省略するが，全国人口を1600年に1500万人，1720年に3200万人，1870年を3300万人として，各時期の出生率を幾通りか仮定してはじき出した結果，1600年以後の270年間に生まれた人の数は2億5000万人から2億6000万人と計算される。この中間をとり，1600年の1500万人を加えた2億7000万人が，江戸時代をいきた人々のおよその数ということになる。

それでは江戸時代に生まれたひとびとは何歳で結婚し，何人の子供をもち，何歳で死んだのだろうか。現代の日本では著しい少子高齢化がすすんでいる。出生率が人口再生産ライン(合計特殊出生率で2.0

8が人口規模を現状に維持できる水準)を大きく下回っていること,死亡率が減少したおかげでおおぜいの人が高年齢まで生き残れるようになったことが原因である.さらに少子化の背景には夫婦の出生抑制(産児調節)の普及と晩婚化があった.晩婚化は,いまでは「非婚化」に移っているともいわれている.生涯独身で過ごすひとびとが増えているのではないかというのである.世帯の構成も変わった.核家族世帯と単独世帯の増加である.核家族化の必然的な結果として,家族のライフサイクルの最終場面で高齢者の夫婦世帯と単独世帯の増加をもたらす.

このような変化が起きる前の江戸時代の人口と家族は,多産多死(高出生率,高死亡率),短い寿命,「皆婚」社会,伝統的世帯(跡取りになる子供だけが結婚してからも親と同居する直系家族)が特徴であったのではないかということになるが,実態はどうだったのだろうか.

過去の人口現象を研究する学問を「歴史人口学」(historical demography)という.デモグラフィー(demography)ということばには「民衆に関する学問」という意味がある.歴史人口学という学問をつうじて,江戸時代を生きたひとびとの一生を垣間見ることにしよう.

2. どうやって人口を数えるか? 宗門人別改帳と子午改め

今年(2020年)は5年に1度の「国勢調査」が行われた.日本で国勢調査がはじめて実施されたのは1920(大正2年)年である.現在ではこのほかに「住民基本台帳」制度と「戸籍」があって,とても詳しく人口の規模や状態を把握することができる.住民基本台帳は住民登録制度(1951年開始)を引き継いで,1967年から実施されている.国勢調査以前には,戸籍簿にもとづく統計がある.近代の戸籍は1872年にはじめて編成された.これによって人口の状態(静態統計)と人口動態(出生,死亡,結婚,離婚などの異動)が把握できる.1899年からは人口動態統計は充実した.

江戸時代の人口について教えてくれる史料は「宗門人別改帳(しゅうもん にんべつ あらためちょう)」である.戦国時代から江戸時代初期には,大名たちが必要に応じて人口調査を行った.しかしこれは臨時的なものであり,戦力と生産力を確保することが目的だったので,女性,子供,高齢者についてはあまり詳しくない.江戸時代初期にはキリシタンを取り締まる目的で,宗門改めが行われた.これが人別改めと合体して全国的に実施されるようになるのは,1671(寛文11)年に出された幕府の法令によってである.明治になって戸籍が作られるまで,200年にわたって戸籍の代わりをはたしていた.

宗門人別改帳は町村ごとに作成されたが,そのすべてが現在まで残されているわけではない.全国人口については,8代将軍吉宗が全国の所領に人口を報告させた1721(享保6)年から知ることができる.幕府の全国人口調査のはじまりである.その後1726年からは6年に一度定期的に調査することになった.子午改めという.現在,幕末の1846(弘化3)年までの125年間に,全国人口は19年度分,国別人口は12年度分が知られている.

宗門人別改帳は1年に一度,そこにいるひとだけが調査の対象にされたから,生まれてすぐに死んでしまった子供は調査されていないなどの欠陥もあるが,毎年の記録を繋ぐことによって現在ではとても困難な,個人の追跡調査を行うことができる.さらに死亡を記録した寺院の過去帳や,間引きの取締と養育手当て支給するのを目的に妊婦を調査した懐妊書上帳など,江戸時代は人口史料の宝島だといわれている.

3.江戸時代の人口は停滞的だったのか？

人口の持続的な増加は近代特有の現象であるとみられてきた。それでは前近代の社会では人口はあまり増えず、停滞的だったのだろうか。そんなことはない。1960年代の「人口爆発」と呼ばれるような高い人口増加率ではなかったにしても、江戸時代の前半には大きな人口成長があったことは確実である。諸藩の人口記録や初期の宗門人別改帳から、17世紀には年率0.5%から1%ちかい増加が続いたとみられる。1600年の人口は1200万人から1800万人あったと推計されている。おそらく15000万人が適当というのが報告者の考えである。1721年の全国人口調査では2600万人、これに武士などの除外や調査から漏れた人口を加味すると、実際には3100万人程度であったろう。しかしこの年から、江戸幕府最後の人口調査が行われた1846年間での125年間に、調査人口はわずかに3%増えただけであった、江戸時代後半の人口の停滞は、「小氷期」と呼ばれる気候寒冷化により、頻繁に凶作が発生して、飢饉が起きたためであるといわれてきた。飢饉と栄養不足がもたらす病気に対する抵抗力低下が、よおおくのひとびとのいのちを奪ったことはたしかである。しかしそれだけではなかった。現代流に言えば「少子化」がおきていたのである。

一人の女性が生涯に生むであろう子供数を意味する合計特殊出生率は、17世紀末期には6ないし7に人と推定されるが、18世紀中頃までに4人程度の低下した。50歳まで結婚していた女性が実際に生んだ子供数(完結出生数)は同じ期間に7,8人から6人へと縮小した。5人を生むという慣行はその後も長き維持されて、それが減少しはじめるのは大正生まれの女性からであった。

晩婚化も起きていた。現代の日本では生涯未婚率が高まる傾向にあって、「結婚しないシングル化」「非婚化」が進んでいるといわれる。江戸時代には前半には多くの男女が結婚するのは当たり前という「皆婚化」が進み、江戸時代中期には皆婚傾向の高い社会が成立したと見られる。それを前提にして晩婚化が進んだ。江戸時代後半の女性の初婚年齢は平均して3年程度高くなったがそれは、おもに女性が商家や武家に奉公に出ることや、織布などの家内工業に従事することによってもたらされたと考えられている。

出生率の低下と晩婚化はなぜ起きたのだろうか。理由は農家の経営面積が大幅に縮小したことに原因があった。経営規模の縮小は、人口増加の結果、耕地面積がそれに見合うだけ拡大できなかったということだけでは説明できない。むしろ燃料、肥料、用水などの資源供給の制約のほうが強かったのではないか。土地生産性を高くするような労働集約的農業技術が、狭い土地で家族を養っていくことを可能にした。しかし子供数に分け与えられる土地は少なかったから、子供数はかろうじて家が存続し、継承されていくにたるだけに制限したのである。さらに少子化を可能にした背景には、幼児死亡率の低下があったこともわかっている。

現代から見れば江戸時代は短命で早婚、子だくさんの社会であったが、その内部では18世紀中頃までに、晩婚化、少子化が進み、寿命も5,6年は伸びたと見られる。その結果、高齢者(江戸時代の場合、数え年で60歳以上)の人口比率は、信州横内村の場合、17世紀末期から1世紀の間に7%から14%へと倍増した。江戸時代にも高齢化があったのである。

4.病気と死因

明治末期に死亡数が1万件を超える死因は、下痢・腸炎、肺結核、脳膜炎(脳脊髄膜炎)、肺炎・気管支肺

炎, 脳出血・脳軟化, 老衰, 胃の疾患, 畸形・先天性弱質, 急性気管支炎, 心臓の器質的疾患, 癌, 腎臓炎, 腹膜炎, 子癇・小児のちくろ (けいれん・ひきつけ), 脚気, 慢性気管支炎, 腸結核, 黴毒 (梅毒) など23種であった。

江戸時代の死因についてはあまりよくわかっていないが, 20世紀初頭までの状況とよく似たものではなかったか。ただし種痘が一般化する幕末以前には子供の多くが数年に一度は襲ってくる痘瘡 (天然痘) で死んでいた。麻疹, 風疹も子供にとって致命的な病気だった。18世紀になるとインフルエンザは世界的な流行に連動し, 19世紀の文政期以後, コレラが致命的な流行病として猛威をふるった。なお女性では妊娠期間中および出産時の死亡も多かった。現代と比べて「プロダクティブ・ヘルス」の著しく低さは, 妊娠・出産年齢の女性の死亡率を引き上げて, その結果, しばしば寿命は女性より男性のほうが長い場合があった。江戸時代のひとびとの死は, 現代日本とくらべて, 子供, 女性で頻繁に起きていた。そして感染症の猛威にさらされ, 飢餓による死亡も珍しくなかった。人生は自然の意のままに委ねられていたと言える。

しかし江戸時代にも技術, 医薬, 生活水準, 制度の変化が, 死亡率や人の死にかたを変えていたのも事実である。そのよい例が死亡の季節性である。下総の寺院過去帳 (日蓮宗本土寺) によると, 1394 (応永元) 年から1592 (天正20) 年にいたる200年間の死亡の季節性は江戸時代とは大きく異なっていた。<前近世>型ともいべきその季節型は, 春から初夏 (とくに旧暦5月) に死亡率の山があることが特徴であった。このような季節型は江戸時代後期にもみられないことはないが, 凶作期に限定されていた。これに対して15世紀の下総では, 春の山が全期間をつうじていつもみられたのである。その理由として, 米が収穫される前の, 端境期の食糧不足による飢餓が恒常的であったことを示すものと説明される。このパターンは, しかし16世紀になるとわずかながら変化する。5月の死亡割合が低下するのである。その理由として裏作として夏麦栽培がこの地方で普及したことの重要性を指摘される。米の端境期における食糧供給が安定化したのである。

5. ライフサイクル

現代と比べて, 早婚, 多産, そして短命の江戸時代農村では, 親子3代が同居する「直系家族世帯」が一般的だった。結婚までこぎつけた男女がその後どのような一生を送ったかを平均的な姿を見てみよう。江戸時代農村 (一八世紀), 大正期 (一九二〇年), 現代 (一九九〇年) の三つの時期について家族周期を比較すると, 第一に結婚に始まるライフ・サイクルの全期間の長さ (結婚時の余命) は一八世紀には現在より約二〇年も短い。第二に結婚から末子出生までの出産期間は, 著しく長い。出生数が五人と多かったためである。第三に, 長子出生から末子の成人 (または学卒) までの子供扶養期間も長かった。第四に核家族を想定して末子が成人するとともに巣立って夫婦だけになる「エンブティ・ネスト」の期間を計算すると, 現代では三〇年以上あるが, 江戸時代にはほとんど存在しないくらいである。

家族形態が伝統的な直系家族であるときにはどうなるだろうか。長子 (男子) のみが結婚してからも親と同居する場合を考えてみよう。現代では直系二世帯夫婦の同居期間 (二七年), 三世帯同居期間 (二五年) は, 子の扶養期間を上回る。これらの期間は大正期には現在の半分以下, 江戸時代に遡れば, 結婚から妻の死亡までの二世帯夫婦同居期間は現在の三分の一, 三世帯同居期間はわずか五分の一でしかない。

江戸時代の農村社会では、死に譲りにしても生き譲りにしても、還暦前後に集中して相続が行なわれ、世代交代が行われていた。夫の還暦とともに隠居し世代交代が行なわれたとすると、江戸時代には引退後の期間、すなわち子にとっての老親扶養期間はわずかに三年程度でしかなかった。大正期においてもその期間は五年である。寿命の延びた現在、この期間は著しく長くなった。夫六五歳をもって引退とすると、老親扶養期間は二〇年に近く、寡婦期間も八年に伸びている。

6.人口史からみた江戸時代

江戸時代には前半の高成長と後半の停滞がひじょうに対照的である。このような波動的な人口の変化は、現在も含めて過去一万年間に四回あった。人口の波動的変化は文明システムの交替と関連しているというのが筆者の仮説である。

人口は自然環境の変動によって影響を受けるとともに、文明システムの転換や国際関係の変化とも密接に関連していた。新しい文明システムの展開は、食糧生産力の向上と居住空間の拡大を通じて、社会の人口収容力を増大させる。人口が増加を続けて、環境と文明システムによって決められている人口収容力の上限に近づくと、なんらかの規制要因が働いて人口成長はブレーキをかけられ、やがて停滞せざるをえない。人口が長期にわたり持続的に成長する局面は、文明システムの転換が生じた時代であった。反面、技術発展にとって人口圧力の高まりが不可欠である。人口収容力の上限まで人口が近づくと資源・エネルギーと人口とのあいだに緊張が高まり、生存をめぐるさまざまな問題が発生するであろう。このように人口圧力が大きくなったとき、社会内部における技術開発や外部文明からの技術移転が強く促され、その結果として文明システムの転換が起きると考えられるのである。

人口の第一の波は縄文システムの展開とともに生じた。この時代の生活様式は狩猟、漁撈、採取を基調とするものであったから、人口分布も人口変動も、自然環境の影響を強く受けた。事実、日本列島の平均気温は縄文時代の幕開けとともに上昇していたことが明かにされている。ところが縄文前期をすぎると平均気温は低下しはじめる。その結果、狩猟採集民としてはひじょうに高い人口密度に達した東日本、とくに関東と中部では人口が激減した。暖地であった西日本では人口の損害は小さく、増加し続けた。しかし西日本はもともと食糧資源の少ないところであったから、ここでも人口圧力は著しく高められたと考えられる。生態学的危機の到来は、新たな食糧資源の開発や農耕の受容への積極的な努力を促したであろう。

弥生時代以降の人口増加は水稻農耕を基盤とする水稻農耕化システムの展開によって支えられた。大陸から渡来したひとびとの人口流入の寄与も大きかった。しかし平安時代になって、人口成長は鈍化したものと推測される。可耕地の減少、荘園経済化による成長誘因の欠如、それに気候変動（温暖化にともなう乾燥化）がもたらした結果であろう。興味深いことは、人口が停滞化する一〇世紀に国風文化（藤原文化）が成立したことである。農耕をはじめ、国制、法律、文字、宗教などさまざまな装置群を大陸から摂取することから始まった文明システムの転換が一段落し、日本的に消化されることによって、文明の成熟化とも呼ぶべき現象が起きたのである。

第三の文明システムは経済社会化システムである。江戸前期に連なる人口成長は、十四・十五世紀に始まったと推測され、それを支えた原動力が経済社会化、すなわち市場経済の展開に求めることができるからである。室町時代は文明システムの転換にとって重要な時代であった。現代日本人にとって伝統的な文化

とみなされているものの多くがこの時代に生まれ、あるいは中国・朝鮮・ヨーロッパ(南蛮)などから取り込まれた。

十八世紀になると一転して人口は停滞する。重い年貢賦課や度重なる飢饉によって餓死や墮胎・間引が横行したためであると説明されることが多い。しかし最近では、死亡率はむしろ改善されており、墮胎・間引にしても将来の生活水準の低下を防ぐ目的で、予防的に行なわれていたとみなされている。農家副業や出稼ぎ奉公によって晩婚化も進んだが、これもかならずしも生活苦のためとはいえ、世帯の所得は増加したと考えられる。市場経済化が進み土地利用も高度化したとはいえ、人口成長は人口と土地とのバランスを悪化させて、十七世紀末から十八世紀にかけて生態学的緊張は高まった。この時代には地球的規模の気候寒冷化(小氷期)が進んだのは事実であるが、人口停滞は自然環境の変動によりたまたま引き起こされたものではなく、土地に基礎をおく「高度有機経済」(E・A・リグリー『エネルギーと産業革命』)としての徳川文明が成熟期にはいったために生じたと考えられる。

幕末にはじまっていた人口増加は、工業社会へ変貌していくことによって支えられ、持続的な成長がもたらされた。しかし今や少子化が進んで、間もなく人口減少社会に移行することが確実になった。過去の経験に基づくならば、現代の工業文明システムは成熟化しつつあるということであろう。人口減少または停滞社会がどのようなものになるのか、われわれには不安がいっぱいである。しかし同様の局面を過去の日本列島は経験してきたのである。その詳細を知りうる江戸時代後半の社会は、21世紀日本を探るうえで有力なてがかりになるであろう。